

シトシトと雨の降る春の宵であった。政夫は今朝郷里の姉からきた手紙を読んでいた。幾枚かの用箋に細かくしたためられた、かなり長い手紙であった。すっかり変わってしまった町や村のこと、長年住み馴れた家の様子など、久々の音信であっただけに一層懐かしく思いつつ、一字一句味わうようにゆつくりと読んでいった。

若くして夫に先立たれた姉は、二人の幼子をかかえて冷たい世間の荒波にもまれながら、この子たちが一人前になるまではどんなことがあっても頑張らなければ、といつも口癖のように言っていた。その娘の三恵子が今日無事に婚礼の式を挙げたとか。長い間苦勞をしてきた姉の心境がまざまざとその文面に偲ばれるのであった。あの三恵子ももうそんな嫁にいく年頃になっていたのか。十年前、母に手をひかれて、ニッコリと微笑みながら、プラットホームまで自分を見送ってくれた当時のあどけない三恵子のお下げの黒髪が、そんな苦勞の中にあっても尚変わらぬ愛情を示してくれた姉に対して、政夫は何か言いしれぬ感情が胸を塞いだ。

雨はすっかり止んでいたが霧が潤んだように街灯の淡い灯が濡れた歩道を照らしていた。遠い昔の記憶をあれこれと思いながら、海沿いの暗い松の木陰をゆつくりと歩いていった。どこか遠い船の汽笛が二度三度、むせぶように長く尾を引いて消えていった。

政夫の父は彼が十二年に亡くなった。秋とはいえその日も厳しい残暑で、裏庭の大きな桐の葉が濃い影を作り、垣根の隅の真つ赤な鶏頭の花が燃えるようで目に痛かった。酒好きの父は政夫が物心ついてからも一日として晩酌を欠かしたことがなかった。機関夫で負けず嫌いの父も、子供に対しては全く別人のようにやさしかった。そんな父の背に負われて、村の祭りや盆踊りを見に行ったりした幼い頃の感慨が、今政夫の胸に甘くほのかによみがえってきた。父が亡くなった後、一人の姉と母の愛情を欲しいままに育ってきた政夫も、やがて暖かい我が家を去らねばならぬ時がきた。

いつの頃からか、左の腕にあつた牡丹の花びらのような小さいアザが今日の悲しい運命の兆しであつたとは夢にも思わなかった。入園の前夜、母は涙ながらに支度をしてくれた。勝ち気な姉は、さすがに涙こそ見せなかったが、何か重苦しい表情で寂しい別れの晩餐を作っていた。療養所とはどんな所だろうか。わずか十六才の少年政夫は、不安と悲しみにじっとしていられなくなつてそつと裏庭に出て、今しも暮れんとする美しい夕焼け雲をじっと見つめていた。もうこの家にも二度と帰つてくることはあるまい。ああ父が元気でいてくれたらと思うと涙がとめどなく頬を濡らし、姉がそつと後ろに来て立つていたのも気が付かなかった。

「あんまり心配したら病気に毒やで、あちらに行つても体に気を付けてしつかり養生せなあかんぞ。」

政夫は涙に濡れた顔を見られまいとしてうつむいたまま、じつと姉の言葉を聞いていた。

「姉さんもあなたのことは決して忘れへん。いづれ母さんと面会にいくからね。」

政夫は泣くまいとしても、そつと肩に手を置いてささやく姉の言葉にジーンと熱いものが込み上げて、ホロホロとあふれる涙をどうすることもできなかった。

ふと我に返つたとき、政夫はいつか暗い渚に立っていた。ひたひたとうち寄せる春の潮がすぐ足元にあつた。冷たい世間の目を逃れ、世の片隅にひたすら病と闘つてきた政夫の心は、常に故郷への愛着を捨てることができなかつた。

風雪十年、思えば長い年月を幾度か、絶望の谷間に陥らんとする自分を励まし、勇気付けてくれたのも、この姉があつたらばこそではなかつたか。生涯をこの島に生きる自分は、社会に対する未練も愛着も打ち捨ててこの島の土となることを、政夫はすでに家を出るとき、固く心に誓つたはずではなかつたか。亡くなった父の顔、母の顔、そして姉の幻が重なり合つて消えてゆく。

「おまえはもう子供ではないのだ。いつになったら姉さんに苦勞をかけずにすむのか。」

静かな潮騒の音にまじつて、そんな父の声がした。政夫はハツとして我に返つた。そして今まで随分姉に無理を言つて甘えてきたことが何か悪いことでもしていたように思えて、恥ずかしさに耐えられなくなつた。そうだ、自分はどう子供ではなかつたのだ。この島を第二の故郷としていつまでも生きてゆくのだ。強くなれ、そして明

るく命のある限りを三恵子の幸せのために、そして長年自分に尽くしてくれた姉の献身的努力と恩愛に報いるためにも……。それが自分になし得るたった一つの償いであることを、今改めてはつきりと悟ることができたのである。夜もすっかり更けて冷えきった大気に政夫は思わず身を震わせた。ふり仰ぐと、いつの間にか雲が途切れ、そこから淡い月光がそっとのぞいていた。

(昭和三十二年九月)